
Under The Xmas Tree

縁起屋こまり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Under The Xmas Tree

【Zコード】

Z86790

【作者名】

縁起屋こまり

【あらすじ】

「アイシテル」

8年越しの片思いの相手から突然の告白。そして放置。

二人の「アイシテル」は同じなのか、それとも全く違うのか。女タラシの礼一郎とトコトン鈍い節との、微妙に温度差のある恋物語。クリスマスツリーの下のプレゼントは、果たして礼一郎のモノになるのでしょうか。

「良い子にしてたら、きっと本当に欲しいものがプレゼントされるわよ」

「うん。僕、良い子にするよ」

母の笑顔に白々しい作り笑いで応えたのは、確か小学生の頃。時は流れ、可愛くない本性を包み隠して生きてきた悪い子には、そんなプレゼント貰えるわけないと諦めかけていた。生まれてから丁度二十年目の十一月。クリスマスを一週間後に控えたその日、喉から手が出るほど欲しいもの 性別女、年齢二十歳 は、わずか數十センチ先で静かに苦笑していた。

「あの実験装置、また良い具合に壊してくれてね」

苦り切つた顔はハーフだという祖母譲りで透き通るようす。決して饒舌ではない赤い唇とか、ひらひら動かすのが癖の細い指先とか、瞬きの極端に少ないハシバミ色の瞳とか。すべて欲しいのに手に入る気がしない。そんなことをぼんやり考えていた思考の隙を見事について、突然それこそ何の脈絡もなく前触れすらもなく、そのままの言葉はいきなり耳に飛び込んできた。

「愛してる」

アイシテルと確かに聞こえた。

色氣も何もあつたもんじゃない物言いは、耳に慣れたお馴染みのもので。世話話と寸分違わぬ口調には、だからこそ嘘も方便もこれっぽっちも含まれていないと分かる。ざわざわと煩い学食のテープルの端っこで、彼女は唐突にそう言ったのだ。告白というにはあま

りにも日常通りで、それで逆にとんでもなく混乱させられた。その時二人が食べていたものといえば、本日のA定食「理学部オリジナル肉団子と鮭フライ御膳」だつたし。

そんな状況下でさえ、殺傷能力抜群の笑顔に釘づけになる。言われたこつちは呆気にとられて声もないのに、彼女といえばやけに晴々とした怖いくらい満足げな顔で立ち上ると「じゃあね」と一言。相も变らぬ潔い去り際は、まるで一陣の風の様だ。

「…えつ…夢?」

やつと衝撃から立ち直った時には、もうプレゼントは田の前からキレイさつぱり搔き消えていたという驚きの現実に、やはり声もない。

— 聖なる夜に —

見上げると、刃物で薄く削いだような三田円が澄んだ夜空を照らしていた。もう後わずかで日付も変わる。雲一つない空は地上の熱を容赦なく奪つて、一人佇む節の体を芯から冷え込ませた。

「放射冷却かあ」

眩きが白い。冷氣は節の白い顔を容赦なく凍らせ、眩き声は一言

で途切れた。振り返ると、第一の自宅ともいえる実験室は遙か後方。足の向くまま歩いていたら、いつの間にかずいぶん遠くまで来てしまったようだ。セーターの上に白衣を着ただけの節は寒さに身を震わせると、しかし温かい実験棟に戻ることなく、そのまま足元の芝生に「ひり」と横になつた。

節が見上げているのは、図書館の三階付近まで枝を伸ばした一本のモミの木。誰が一体どうやって付けたのだろう。立派なモミの木の天辺には、ピカピカ力と銀色に光る星の飾りが一つ。まるで空を懐かしむ様に、右肩上がりに天を仰いでふんぞり返つている。視力の悪い節の目にもはつきり分かるほど大きく、手作り感満載に不格好なそれは。

「ベツレヘムの星のつもりかなあ」

呆れ混じりで呟いて、今日が何の日かやつと というか、ついにというか 節にも思い当つた。クリスマスイブなのだ、たぶん。深夜だらうと人の気配の絶えない実験棟が、だから今夜に限つてこんなに静かだつたのだろう。

聖なる夜か。

節はぼんやりと考え、まあどうでもいいやと独りごちた。冷たい外気は寝不足で火照つた顔をあつという間に凍えさせる。それがなんだか無暗に気持ち良くて、節は小さく唇を緩ませた。かじかんだ指で白衣のポケットから煙草とライターを引きずり出すと、節は寝こんだまま火を付け深く吸い込んだ。白い煙と白い息が、ゆらゆらと揺らめいてまるで雪のようだ。暗闇の中、煙草の赤い火が節の呼吸に合わせて強く弱く点滅する。それはまるで小さなイルミネーション。

星一つのモミの木一本に、真紅の電飾が一つ。月も一人。そして節も一人だ。殺風景なクリスマスツリーは、殺風景な自分にこそ相応しい。節は素直にそう思った。

それなのに

「なんで私はあんな」と言ひ切ったのかなあ

一週間前、節は生れて初めて告白といつやつをした。言おうと決めていたわけではなく、それこそ発作的に。それは、ロマンチックな響きのある「告白」よりもむしろ、出会い頭の事故、アクシデントにより近い。なにより、言つた自分に自分が一番驚いたくらいで。

ただ、気分は悪くない。後悔もしていない。

節が気持ちを打ち明けたのは、中高と同じ学校で友人の礼二郎だ。その上大学まで同じだから、もう腐れ縁というやつに間違いない。目を閉じると浮かぶその整つた横顔。温かい笑顔と裏腹に辛辣な物言いのその友人を、特別な目で見ていていることに気づいたのは実は最近のことだ。学食で向かい合つてランチを食べていた時、礼二郎のどこか焦点を失つたような瞳につられて、気がついたら口に出していた。

アイシテル。

一言。タイミングも何もない。気がついたら、言葉は勝手に口から滑り出していく。言わずにいられなかつたから、言つた。それだけ。

「魔がさした…わけじゃないと思ひ

ため息と共に煙草の煙を吐き出すと、節は瞬きもせず作り物の星を見上げた。

「まあ、なんにせよ言いたことは言つたし。スッキリしたから、まあいいか」

「スッキリしたからこいつて、どうこうことだよ」

突然割り込んできたのは、不機嫌丸出しの声。確認するまでもなく確実に怒っていると分かる、その聞きなれた口調は。

「礼一郎」

噂をすればなんとやらだ。降つて湧いたように現れた銜え煙草の友人に、節は驚いて目を見張つた。ああ、ツリーの電飾がこれで二つだ。何の脈絡もなく、節は頭の隅ついでそんなことをふと思ひ。なんとなく嬉しくて頬が緩んだ。

「こなとこりで何やつたらの」

「その言葉、そつくりそのままお前に返してやる、節」

路上に転がった節を冷たく見下ろして、礼一郎は首だけ捻つて煙草の煙を吐き出した。

「あーっと…星空観察？」

「…寝ぼけたこと言つてじやねーよ、節。お前さあ、今の気温何度か知ってる？マイナス3度。氷点下。今夜は今年一番の冷え込みになるつて、夕方テレビでヨシヅミが言つてたの聞いてねえのかよ。この寒空に外で寝るつて、ホントお前バカじやねえの。観察してる間に、お前がお空のお星様になるつづーの」「ああ…そうだねえ。星空観察でお星さまか。礼一郎はホント上手いこと言つわ。ミイラ取りがミイラになるつづー、いつもことなんだろうか

「反応するの、ソロがよ。ふざけんなよ、節」

節が本気で感心したら、真剣に怒られてしまった。しかし、生憎と礼一郎の言葉はいささかも節の胸を傷つけたりしない。だつていつもの事だし、それにきつい台詞は心配の裏返しなのだ。長い付き合いの節にはそれが分かる。礼一郎はいつだって優しい。それがなんとも嬉しくて、節は穏やかに笑み崩れる。

「心配掛けゴメン。それと、心配してくれてアリガト」

まっすぐ目を見たら、視線を外されてしまった。眉間にしわを寄せた横顔が、ほんのりと赤い。風邪でも引いたのだろうか。節はにわかに心配になる。

「大丈夫？ 礼一郎、顔が赤いよ。風邪？」

「うるせえ、バカ。じろじろ見んじゃねーよ」

煙草の吸殻を親の敵みたいにギュウギュウ踏みつけると、礼一郎は大きく舌打ちした。仕立ての良さそうなロングコードが嫌味なほど良く似合っている。知り合った十一の年から数えて八年と八ヶ月。女つ気の絶えたためしのない男前は、不特定多数の女たちに向ける甘い顔とは裏腹のキツイ眼差しで節を睨みつけた。

「散々あちこち探させやがって。どうせお前のことだから、今日が何の日かなんて気づいてもいらないんだろうけど。たく、この俺が必ず探してるって時に、なんでこんなトコで楽しそうに転がつてんだ、お前は」

「見て分からぬかな、礼一郎。今夜は聖夜でしょ。だから私はこうやつて星空観察しつつ、天にまします我らが父に祈りを捧げてるんじゃないの。友人のよしみで、礼一郎の幸せもちゃんと祈るから感謝してよ」

「はあ？なにその上から田線。しかも、この寒空に路上に寝転がつて段ボールにアルミ箔の星付けたツリーの下でお祈りって、マジありえねえ。祈りが届く前に昇天するつての。つかお前、今日がイブだつて気づいたの、どうせあの不細工なお星様見てからだろ。つまんない嘘つくんじゃないよ」

「バレたか

どうやら今宵の友人は思いの外「機嫌斜めらしい」。節は真顔であつさり肯定した。人当たりと外面のいい礼二郎が、ほとんど節にしか見せないツレナイ態度には慣れっこなのだ。

「当たり前だ、馬鹿。お前がこいついうイベント事に、ありえないくらい疎いのは知ってるんだよ。一体、何年の付き合いだと思ってんだ」

女なら誰でも本能的に知ってる筈のイベントに、節が自分から気づいたことは一度としてない。礼一郎が山ほど貰ったプレゼントをさりげなく、ある時は大っぴらに見せびらかしてはじめて、「ああ」と興味無さそうに頷くのが常なのだから。

「や、私日本人で仏教徒なんで異国のお神様の行事はちょっと…。灌仏会（釈迦の生誕を祝う行事）ならわかるんだけど」

「灌仏会知ってる奴がなんでクリスマス知らねーのか、俺にはわかんねーよ。たく、何が異国の神様だ。クリスマスくらい幼稚園児だって知ってるだろ」

寝ころんだ節の隣にしゃがみ込んで、礼一郎はくつくつと堪えきれずに笑い声をあげた。

「やつと笑った

つられて節が笑う。節は礼一郎の笑った顔が好きなのだ。他の女子たち用の完璧に取り繕つた笑顔を羨ましく思つた事はないが、節に笑いかける不思議に子供っぽい顔を心から好ましく思う。あまり感情を動かされない節が釣り込まれて微笑んでしまうほど、心が芯から暖かくなるようなその笑顔が好きなのだ。

「くそっ」

礼一郎は舌打ちすると、うつかりと赤らめてしまつた頬に手を当てて節の顔をジロリと睨んだ。

「そんなくだらない話をしにわざわざ来たんじゃねーんだよ、俺はなんだよ節、一人だけスッキリした顔しやがつて。気にくわねー」

「スッキリしちゃマズイの」

「当たり前だ、馬鹿」

不貞腐れたように礼一郎が言つ。

「あんなこと言つて人を煽つとして携帯に電話してもお前出ないしメールも返さない。アパートにはいつ行つても居ないから実験室に籠つるのは分かつてたけど、実験終わつたつて聞いて駆け付ければ近田にもういなつて言われてさ。こつちはもうずっと焦つてイライラし通しだつてのに、その当人が一人で勝手にスッキリしてつてどういうことなんだよ。お前、自己中すぎ。そんで、その何でも自己完結する癖やめる。少しは振り回されるこつちの身にもなれよ」

「よ

よほど腹にすえかねたのか、礼一郎は節の顔から片時も目を離さずに一気に言い募つた。無視するつもりはなかつたが結果的にそうなつていたらしいと気づいて、節はすまない気持ちになつた。振り

回す気なんてないが、礼一郎のことをきれこさっぱり忘れていたのもこれまた事実で。

節は傍らの整った顔を申し訳ない気持ちで見つめて、「『めん」と一言、寒さで上手く回らぬ舌で謝った。この一週間といつもの、実験装置の不調で実験室に缶詰状態だったのだ。とはいって、当たり前だが外部と連絡できぬわけでも、出かけられないわけでもなかつたワケで。

「『めん』で済めば警察は『いらねーんだよ』

「うん。でも、『めん』

瞬きもせず見上げる瞳をチラリと見て、礼一郎は深いため息をつく。本当に言いたい事はそんなことではないのだ。謝らせる気もない。子供のように拗ねて、そして馬鹿みたいに焦っているだけながら、なんとも歯がゆくて仕方ないのだ。

馬鹿なのは俺で、節じじゃねーの。

礼一郎は小さく首を振ると、もういいとも、と今度ははつきりと言つた。

「で、節。携帯はどう」

「携帯?『うーん…たぶん、家?』

節は腕組みすると、軽く眉を寄せて東の間思案した。そう言えども、こことのところすつと携帯をいじつていない。というか見てもいなかつた。そのまま直に答えたらい、ものすこし凶悪な顔で睨みつけられた。

「あ、ははは…『メンナサイ』

「…頼むから、携帯くらいはそばに置けよ」

「…気をつけマス」

夢中になると、他が全く見えなくなるのは節の悪い癖だ。節も頭では理解していたのだが、今回もまたやつてしまつたらし!。どうやら、礼一郎は連絡して欲しかつたようだ。そのことに、やつと気がつく。今更気づいても遅いのだが、きっとまた氣を使わせてしまつたんだろうと節は思つた。友達なのにあんな考えなしなことを言つて、なんだか悪いことをしてしまつた。節は小さくため息をつく。

「「めん、礼一郎。えつと、なんだ、あんなの氣にすることなかつたのに。私は別に何かして欲しいわけじやなく、言いたくなつたら言つただけで他意はないんだよ。だから、礼一郎が氣にすることなんて何もない。その、氣を使わせて悪かつたね。それより、今日つてクリスマスイブなんでしょう。こんなところで油売つてちゃマズイんじゃないの。待たせてるんでしきう、彼女。早く行つてあげなよ」

申し訳なさで一杯の節は、心からのお詫びを込めてそう言つた。なのに、礼一郎は苦虫を千匹は噉み潰したような顔をして頭を抱えている。

「…節、お前…はあ……こねーよ、彼女なんて」

力の抜けた声で咳くと、礼一郎はがつくりと肩を落とした。それを聞いて、節ががばつと身を起こす。

「ええつ?何だ、また別れちやつたの、礼一郎。あの子、えーっとアサミちゃんつていつたつけ。可愛かったのにもつたいない。でも、だったら尚のことこんな所にいちや駄目じやないの。あるんでしょ、ほら。クリスマスパーティーとか合コンとか」

「そんなの行くか！つか、なんで節がアサミのこと知つてんだよ！」「なんでって、礼一郎が付き合ってる子は、いつも大概島津くんが教えてくれるからさ」

「…なつ、島津って、もしかして地理研の島津？金髪でピアスマニアの？なぜ節がアイツを知つてんだよー！」

礼一郎は心底驚いて、不思議そうに小首を傾げる節に詰め寄った。地理研の島津と言えば、言わずと知れた礼一郎の遊び仲間。人の悪さでは人後に落ちない礼一郎の質の良くない友人の一人だ。自他共に認める女たらしで、つまりは礼一郎の同類なのが。

「くそつ、あの野郎、いつの間に節に近づきやがったんだ！」

礼一郎は思わず叫ぶと、島津の人を食つたような薄笑いを思い出として、ギリギリと歯噛みした。全く油断するとすぐこれだ。

「島津くんなら、春に学食で会つたんだよ。礼一郎の親友なんですよ。親切で良い人だよね。ちょっとスキンシップ過多でびっくりするけど」

「スキンシップって…節、アイツになにかされたのか！」

「やだなー、そんな心配しなくて何もされてないよ。ただ、会うたびに抱きつかれるから、ちょっと恥ずかしいってだけで」

「…島津の奴、ゴロス」

「えつ、礼一郎何か言つた？」

「別になにも」

間違いなく何の疑問も持つてない節がものすごく憎らしくて、礼一郎は足元の何の罪もない小石をゴリゴリと踏みにじつた。いや、憎たらしいのは節じゃなく島津か。礼一郎は込み上げる怒りを押し殺して、一ヶ口と微笑んだ。

「いいか、節。言つとくが、アイツは俺の親友なんかじゃない。島津成人っていう男は、女と見れば見境ない獣みたいな奴なんだ。危ないから、一度とあんな野郎に近づくんじゃねーぞ。アレはいわばバイキンみたいなモンだ。触られると確実に汚れるから、目視で確認し次第、速やかに逃げる。半径三メートル以内に近づけるんじゃねー。それと、アイツの口から出る言葉の99%は、嘘と妄想で出来てると思って間違いねーんだ。だから、アイツの言つことを信用すんなよ。絶対に」

「でも、島津くん良い人じやない。礼一郎のこと、いつも褒めてくれるし」

「アイツが？俺を褒める？」

胡乱な目を向ける礼一郎に、節はこいつと大きく頷いてみせた。

「うん。Jの間も島津くん言つてたよ。礼一郎は最高にイイ男だつて。合戻りお持ち帰り率百パー セントの実績は伊達じゃなくす」いし、視線だけでその気にさせるテクには感動したつて。礼一郎は男が憧れる男の中の男。夜の帝王…ええと、あとは」

「いや、もういいよ、節。…つか、島津、絶対コロス」

「まあ、島津くんのことはともかく、礼一郎が女好きなのは私もよく知ってるし、今さら隠すこともないじやない。私にはよく分からぬけど、クリスマスイブってのは若い男女にとつて大事な夜なんでしょう。私はここで陰ながら礼一郎の幸運を祈つてるから、行って楽しんでおいでよ」

屈託なく笑う節が悲しい。心からのものと分かる温かい笑顔に、礼一郎は本気で泣きたくなつた。

「…頼むからそーゆーことは祈るな」

自業自得とは言え、礼一郎は心中で盛大なため息をついた。この八年間といつもの、本命が振り向く気配さえない鬱憤を他の女子と遊んで晴らしていたなんて今更言えるはずもない。礼一郎を見上げる節の顔は滅多にない程の笑顔で、心にもない台詞を無理して言っている様子など欠片もないときているから、尚のこと辛い。

「…愛してるって言つたくせに…」

「えつ、何か言つた？」

「いーや。何でもないんですけど」

「そ」

節は跳ねるように立ち上がると、礼一郎の肩の辺りで一コロとした。その天使のように穢れない瞳に、礼一郎の胸がキリキリと痛くなる。

綺麗で可愛くて優しくて頭が良くて、どうしようもなく鈍感な礼一郎の大変な節。大切にしそぎて、八年間もひたすら眺めるだけだった愛しい人。

「はああああ…全くもう。なにやつてんだ、俺は

今日が何の日かなんてホントはどうでもいいのだ。それでも聖なる夜というのなら、どうか神様、飾り一つのツリーの下に無造作に置かれた、この美しいプレゼントを俺にください。礼一郎は不意に湧き上がった想いに突き動かされて空を見上げた。他には何もいらない。欲しいのはただ一人。節だけなのだ。

衝動のままに、礼一郎は手を伸ばす。

「ちょ…なに? 礼一郎」
「うるさいよ。黙つて、節」

冷え切つた節の細い体はまるで氷のようだつた。礼一郎は節の手を握り締めると、絶対に離すものかと心に決めて、強く強く、その体ごと抱き寄せた。

「はつはふあいはー（あつたかいなあ）」

という節の声はとても楽しそうだ。

カシミヤのコートと礼一郎の腕で丁寧にラッピングされたプレゼント 節だ は、くたびれた白衣」と、躊躇つことなくその身を擦り寄せてくる。

「節

柔らかく愛おしい温もりに泣きそつくなる。安堵の吐息をもらじて、礼一郎は節の髪に顔をうずめた。わずかに香る節の匂いに、なけなしの理性が持つて行かれそうで怖くなる。節を傷つけたくはない。でも、もう本当に限界なのだ。

思えば苦節八年、よくも耐えてきたものだと思つ。礼一郎は、我慢とか辛抱とかの対極にある男だと思われてきたし、実際その通りの生活だった。特に女関係。正直、墓場まで持ちこみたい類の醜聞は一つや二つじやなかつたりする。節には絶対に内緒にしたい。

派手に遊びまわりつつ、節に近づく悪い虫をことじとくぶつ潰す生活はなかなかにハードなのだ。色事に關しては天然記念物並に鈍い節は、自分のことをモテナイ女だと勘違いしているようだがともない。節は友達だと思った奴には際限なく優しいし、八分の一外国の血が混じつた白い顔は誰が見たつて綺麗なのだ。

とりあえず、島津は排除だな。

礼一郎はこいつそりと冷笑する。邪魔はさせない。あの男の弱みなぞとうに掴んでいる。それより今は節のことだ。礼一郎は決意も新たに、節を抱く腕に力を込めてその名を呼んだ。

「節」

「すゞく暖かいねえ、礼一郎つて」

信頼しきった顔で節が唇を綻ばせた。その邪氣のない表情に吸い寄せられそうになつて礼一郎は切なげに目を伏せる。この無防備な笑顔を壊したくないばかりに、今までどれほど無理を重ねてきたことか。だがそれも今夜で終わりだ。礼一郎の手がやさしく節の髪を撫でる。節の温もりに胸が一杯になつて、礼一郎はゆっくりと目を閉じた。どんな手を使ってでも、このプレゼントを自分のものにしてやる。そのためには元来たのだ。諦めてなるものか。

「…節、愛してるよ」

「うん、私も愛してる」

即答だった。万感の思いを込めた言葉に返された、世にもあつけない一言。

躊躇いも動搖もなく、普段となんら変わりない調子でやう言つて、節は花が綻ぶ様にニッコリと笑つた。

「…つづく」

礼一郎の口から不自然な呻き声が漏れた。このシチュエーションで、自分はなぜこんなに不安になるのだろう。自分のアイシテルと節のアイシテルが、同じものとは到底思えないのがその理由だが、怖くてとてもじゃないが追及できそうにない。

「死んだの礼一郎。顔色悪いよ。やつぱり風邪？」

礼一郎を壮絶に不安にさせた「とにかくもせず」と、節はその冷たい指先を目の前の形良に額にそりと押しかけていた。

モミの木は柔らかそうな雪ですっぽりと覆い尽くされていた。

クリスマスから早一ヶ月。不格好な星一つ付けたイブの晩よりも、今の方がよほどソリーメいて見える。図書館前の街頭に照らされたクリスマスツリーもじきをほんやりと見つめて、節はスロープの手すりにもたれかかった。

夕方から降り始めた季節外れの雪は、もうじき日付が変わろうと。いつ今、周囲を一面の銀世界へと変えてくる。朝になればこの美しい雪の絨毯も、登校してきた学生たちに寄つてたかって踏み散らかされてしまうのだろう。しかし今は節一人。羽毛のような白い雪はキラキラ輝いてただ綺麗だった。薄く積もった粉雪を指ですくえ、サラサラと音を立てて落ちる。

「やつぱぱつ！」と叫んだ

「礼一郎」

振り返れば、見慣れた男前が静かに佇んでいた。怒つているような、それでいてホッとしているような。そんな複雑な顔をすると、礼一郎は無言で節に歩み寄る。頑丈そうな黒のマウンテンブーツが白い雪に迷いなく痕をつけるのを、節は何となく羨ましい思いでじっと見つめた。

「なんでここに居るつて分かったの？」
「雪が降ったから」

事もなげに言つて、礼一郎は端正な顔をニヤリと歪めた。

礼一郎はいつもこうやって節の世界に入つてくる。それが少しも不快でないのが逆に不思議だと節は思う。殺風景で熱のない節の世

界を、礼一郎は一瞬で温かい何かに変えてしまう。礼一郎の側は居心地がいい。良すぎてちょっと困るくらいに。

節がそんなことをボーッと考えていたら、いつの間にか田の前まで来ていた礼一郎が節の鼻先数センチの所まで顔を寄せてきた。

「ねえ、節。こいつって余つの何口ぶりだか分かつてる?」

礼一郎がニシコリと余所行きの笑みを浮かべた。ああ、怒つてる。節は少しだけ情けない気持ちになる。繰り返される実験やデータ分析にかまけて、またしても礼一郎のことを忘れていたことにたった今気づいたからだ。

「…えーっと、一週間…くらい?」

実験装置ヒドリ3号、通称ひーさんの調子は今すこぶる良い。データ取りも順調で、ひー一週間は間違いなく外界と接触を持つてない自信が節にはあった。

「はずれ。一週間」

「えっ、そんなに?でも、なんかそんなひさしげりに思えないねえ。チカチカから礼一郎の話を色々聞いてたせいかなあ」

「そりゃそうだろう。なんせ近田とは、毎日連絡取り合つてたからね」

節とは一言もしゃべつてないけど、と礼一郎は不本意そうにその形の良い唇を歪めた。

チカチカこと近田昌親は、節とは同じ研究室の根っから氣の良い穏やかな男だ。節に近づく男は基本排除の礼一郎でさえ、近田と節の交友に口を挟んだことはない。つまり、近田は人畜無害な典型的な「いい人」なのだ。最近では、節の様子を知るためにむしろ礼一

郎の方が積極的に仲良くしているくらいだ。

「へえ、そなんだ。仲良しなんだねえ」

「そ、仲良しなの、俺と近田。なぜだか節とは全然連絡つかないけどね」

と礼一郎。節が小さこ声で「「」めん」とこつと僅かに目を細めて「いいよ」とため息をついた。

「…ところで、節。今日何の日か知ってる?」

何かのついでのように言う禮一郎の声が、ちょっとだけ悲しげだった。節は必死で考へる。きっと大切なことなのだ。そして、自分はまたそれを忘れてしまっているに違ひなかつた。

腕時計をチラリと見れば、日付はすでに変わっていた。といふことは、今日は一月十五日。あつと節の脳裏に何かが閃いた。まさに天啓。今日、一月十五日は

「如月の望月!」

あまりにも嬉しくて、節はウサギのようにぴょんと跳ねた。節の白い顔がたちまち笑顔で一杯になる。

「…ああ」

絶望的な顔で溜息を洩らしたのは礼一郎だ。伊達に八年も側にいたわけじゃない。礼一郎には節が何を考えたのかすぐ分かつた。とうより、分かつてしまつた。悪い事に、礼一郎のこの表情に必死に考えを巡らせている節はまるで気付かない。

節の頭に浮かんだのは、西行法師の有名な歌だった。

願わくは花の下にて春死なん そのをさがめの望月のいり。

無意識に口に出すと、礼一郎が「やつぱり」と呻いて、今度は酔を飲んだような顔をした。しかし、やはり自分の考えに夢中になつている節は、またしてもそれに気がつくとはない。

「礼一郎、分かつたよ」

喜色を浮かべて、節は本当に嬉しそうだ。

「ああ…俺もだいたい想像ついた」

「今日は如月の望月。つまり、淫槃会（釈迦の入滅の日）だひづー」

「…やつぱり、やつ来たか

礼一郎が額に手を当てて低く呟いた。そもそもクリスマスだって氣付かない節が、バレンタインマークを覚えているはずもなかつたのだ。しかし、よりも寄つて淫槃会とは。これが節でなければ、確実に悪意があると思うといつたのだ。

「…いやこやこや、悪いのは節じゃない。期待した俺が間違つてるんだ、きっと」

悪いのはたぶん自分の方なのだ。惚れた弱みだし、と礼一郎は心中で呟く。

「ち、違つた？」

焦つた節もやつぱり可愛い。いや、もう何をしようが節が可愛いことに変わりはないのだ。なら仕方ないではないか。礼一郎はこれ

以上ないほど優しく微笑むと首を振った。

「いや、違わないよ。それで正解」

「本当？良かつた」

「良く気がついたな、偉いぞ、節」

礼一郎はそう言つと、節の髪をくしゃりと撫でた。節が「ココ」
笑いながら、くすぐつたそこに身じろぎする。その楽しげな顔に心
が満たされる。結局のところ、節のその幸せそうな笑顔だけでもう
充分なのだ。礼一郎は冷たくかじかんだ節の手を両手で包みこむと、
温かい息を吹きかけて温めてやる。

「実験、もう終わつたんだる。ウチに来いよ。節の好きなチョコレ
ートが沢山あるから一緒に食べよーぜ」

「うん、行く！ チョコ食べたい」

チョコレートと聞いた途端、節が蕩けるような甘い顔になる。礼
一郎も笑つた。

バレンタインのチョコレートよりも、節の方が絶対に甘い。なら
ば本当にこれでいいのだ。節の甘やかな笑顔一つが、極上のチョコ
に勝る。少なくとも礼一郎にとっては。

神様。

礼一郎は空を見上げると、不敵に笑つた。

ねえ、神様。このプレゼントだけは、何があつても手放しま
せんよ。たとえ俺がどんなに悪い子でもあつたとしても。

「行くぞ。節」

「うん。礼一郎」

礼一郎は節の手を握ると、プレゼントを貰った子供のよつたな顔で
もう一度 笑った。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679o/>

Under The Xmas Tree

2010年11月12日19時37分発行